
少年少女物語 + ただし魔法有り

雄町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女物語 + ただし魔法有り

【Nコード】

N2407Z

【作者名】

雄町

【あらすじ】

+ 『景山辰也』と少年少女の物語。ただし魔法有り。

第零話 とある糞ガキとの出会い

「わたしも、なかまにいられてください」

「帰れ糞ガキ」

「まあまあ」

俺の前でガキが唸る。ちびっこい、六つか七つぐらいのガキ。いっちょ前にどっかから拾ってきた拳銃を両手で抱えて、じっと俺らの方を見つめている。

「君は確か、この村の生き残りの」

「マナ、マナ・アルカナ」

「そうそう、マナちゃんだったっけ。どうしてマナちゃんは僕たちの仲間にいれて欲しいんだい？」

「ケケケ、どーせ口だけだろ」

「ちがう」

「またまたー、そんなふてちゃってさあ」

「さわるな」

ぷにぷにほっぺたを触る俺の手をはねて、不機嫌そうにガキは言う。

「かっちゃん。おにーさんもんな」と言われると怒っちまっよ

「じじい」

「誰がジジイだ？ 言葉使いに気をつけるよガキ」

「辰也、子供に本気になるのはどうかと思っけどね」

「ごどもじゃない、マナ」

「うん、悪かった悪かった。マナちゃんはマナちゃんだもんね」

「そう」

「うぜえ」

「じじい」

「マジでうぜえ」

じろりと俺を睨むガキ。そんなところがガキだったの。ケケケ、どんなに取り繕うともテメエはガキでガキだったの。そんな反応がまさに、だぺう！

「じじいっし」

「……はあ、自業自得だね」

「ぶん」

股間が……俺のもっこりがっ！ 突き出したガキの拳が俺のもっこりを……。

「マナちゃん、君はどうしてそんなことを言うんだい？ 僕たちがどんな人間かは、君も分かっているはずだろう？」

「せいぎのみかた」

「あははっ、そう言ってもらえたらすぐくっつけしいよ」

そういうと男、幸樹は膝を曲げてガキの目線に合わせる。こんなガキにんな真似しなくてもいいつてのによ。相変わらずに優しい奴だわな。

「お父さんとお母さんは？」

「うたれてしんだ。いくところない」

「だから仲間に入れて欲しいの？」

「そう」

幸樹はそんなガキの言葉ににこりと笑う。

「だったら孤児院いけよ。へーんなどこじゃなく、ちゃんとしたとこなんだからよ。それがいい、そうしろ、テメエ以外はみんな行くんだしよ」

「やだ」

「うわ、うぜえ」

「じじい」

「やっぱうぜえ」

「辰也、君もうざいよ」

「お」

へこむ俺を気にせずに、ガキと幸樹の会話は進む。ガキの言い分を要約するところだ。自分は目の前で両親を殺された。そしてその時自分も殺されそうになったんだがうちの人間、つまりNGO団体カンパニラエ・テトラコルドネス『四音階の組み鈴』の団員に救われたそうだ。だから生き残った自分が今度は誰かを救いたい……だそうだ。まあ何ともガキらしい言い分だな。ヒーローに救われたからヒーローになりたいって言うてるわけだし。ちなみにうちは武闘派の団体で、おもにテロリストやら妙な考え抱いてる阿保どもを武力介入で潰すつてのが主な役割。そのあとアフターケアをする団体に助けられた奴らに移したり、殺さず捕まえた奴らを収容所にぶち込むのが仕事。まあ俺は別の団体から来てる、いわゆる派遣社員みたいなもんだけどな。

「ケケケ……幸樹、言ってやれや。ここはテメエが来る世界じゃねえ……ってなんで泣いてんの？」

「僕は今、猛烈に感動している！」

そーいやこいつも戦災孤児だっけ？ たしかこっちの世界に足を踏み入れたのも当時はヒラだったが、うちの団体の団長に助けられ

たのが原因で……。酔っ払いながら絡んできたときの話だからよく覚えてるわ。普段は温厚な癖によ、酒が入ればとーんだめんどくせえ野郎に早変わり。そのくせ酒が好きなんだから夕チがわりい。

「マナちゃん、君のことは必ず僕が団長に話を通してあげるからね！」

「おいおい、幸樹よ本気か？」

「もちろんだとも。さあ、まずは団長のところに行こうか」

「うん」

ぎゅっと拳を握って気合入りまくりの好機をてかてかとガキが追う。その時ちらつと俺の方を見つめて、ガキはフンと鼻で笑って見せた。ああ、やっぱりこのガキうざいわ。

第一話 戦場で卒業するのはできるだけお早めに

団長には殴られ、大いに怒られたが何とかマナの入団は認められた。自分ももう18になり、団長に救われてから12年が経っている。僕が救われた時、団長は今の僕と同じくらいの年齢だった。そう考えるとマナの面倒を見ても、何ら問題はないと思う。家族である団体の人たちもいるし、団長もいるし、何よりあのとき一緒に殴られてくれた辰也がいる。僕の我儘につき合わせてしまった形にはなってしまったが、それでも僕と友達でいてくれる辰也には頭が上がらない。辰也が日本の関西呪術協会からやってきてもう一年が経つ。今度何かお礼を兼ねたお祝いをしなければ、と思う。

マナについては順調に育ってきている。ヒーローとなる術を見つめる。それは同時に人よりも強い力を得て、人を虐げることのできる人間となる術を見つめることに等しい。だがその使い方さえ誤らなければ、人は誰だって誰かのヒーローになれると信じている。そのため優しさも、マナは兼ね備えているはずだ。……相変わらず辰也とは犬猿の仲のようだけだ。

マナはどうやら純粋な人間ではないようだ。そもそもマナの村が狙われた原因も、彼女のような人外とのハーフが何人もその正体を隠して隠れ住んでる、そんな情報がどこから漏れ出し、戦闘兵器に、あるいは見世物や慰め物に、あるいはただ虐げるために。溢れんばかりの目先の欲望に囚われて、行動を起こしたのだから。彼らもまた何か別の道があったのではないだろうか、本当はいろんな事情があつて、仕方なく嫌々に、彼らはそんな行動に走ったのではないのだろうか。僕はいつもそんなことを考えてしまう。辰也に言わせればひどく下らないことらしいけど。相手が生きたいように自分も生きたい、相手が満たされたいように自分も満たされたい、だから

らぶつかるのは仕方がない……そう辰也は言う。僕は……どうしたいんだろつか。ともかくと、今はマナの話。そして二冊目に手が届きそうになったこの日記も、マナのことを書くためのものだ。僕の話はまた、お酒でも飲みながら辰也に愚痴ろうと思う。

マナは半魔族だからか、それとも元からの才能のためか。多少の魔力の扱い方は知っていたようだけど、僕の教えを水が綿にしみ込むように吸収している。マナはどうやら普段から魔力が身体の中を廻っているようで、それを放出する、というのは少々苦手な様子。その反面、供給を行えば僕たち普通の魔法使いよりもずっと効率的に魔力を体に巡らせて、身体強化を行えるみたいだ。マナが僕たちの仲間になってから三カ月が経ったけど、彼女はもう高位魔法使い並みの身体強化を行えている。

でも、マナはそこで終わりだ。絶対的な魔力容量が並ほどしかない。もともと外界から自分の中へと供給し、利用できる魔力量には才能が起因している。人間の場合長年の練磨によってその容量を少しずつ上げることができるのだけど、半魔族のマナは成長によってその容量を上げることができないみたいだ。だったら魔法使いの路線は棄てて本来魔族が扱わない人間の体術をマナに覚えさせて武道家にすればいいじゃねえか、って辰也は提案したんだけど、マナはすぐさま否定した。……そんなに辰也のこと、嫌いなのかなあ。いつもいつもマナは辰也には対抗心剥き出し。普段は楽しそうにじやれてるけど……ほとんどが辰也がマナをからかっているようだけどね。……まあもし武道家になったとしたら、強靱な肉体は持ち合わせているのかもしれないけれど、おそらく彼女は凡庸な人物で終わってしまうんだろつ。魔力や気の量が何にせよとても大事になってくるから。

と、いうことでマナを成長させる方向性を考えなければならぬ

ことになったわけだ。そこで注目したのが本来魔族が何らかの形でもっている特殊能力、半魔族のマナにも例外なくそれは備わっていた。マナの眼は『魔眼』と呼ばれる類のものだった。ギリシャ神話で有名な『メドゥーサ』のような見た相手を石化させるもの、ケルト神話の『バロール』のように見た相手を殺すもの。古今東西、様々な神話や物語で、そして現在僕たちの生きるこの世界でも、いろいろな魔眼が世の中にはある。マナの魔眼は霊体や不可視に纏わせた魔法障壁、姿を隠す魔法みたいに本来見ることでできないはずのものを見る効果があるみたいだ。その副次効果としてひどく視力も強化される。そんななか白羽の矢が立ったのは、マナが僕たちの前に現れた時に抱えていたもの……『銃』だ。

銃には本来マナ程の子供では耐えることのできない反動があるんだけど、身体強化ができるマナにはそこは問題にならない。加えて魔眼がある。幾重にも魔法障壁を張っていたとしても、魔法で姿を消していたとしても、魔眼があればそれを貫けるだけの弾丸を撃ち出すことができる。もしも、これを完ぺきにマナがこなすことができたらならば、彼女は現代の魔弾の射手としてきつと名を馳せるはずだ。だけど……銃はとても具体的な、人が人を殺すために技術の粋を集めて完成させた殺人兵器。彼女にこの使い方を教えるというのは、正直とても気が進まない。だけど僕は信じている。使う正しい心さえ伴えば、きつと銃は彼女のとて頼もしい相棒になるはずだと。

〈高宮幸樹 ある日の日記より抜粋〉

激しい音。ガキの手の中の鉄塊から飛び出してた弾は、100
m先の空き缶にかすりもせず空を切った。

「ごまあ」

「……………」

「無言で狙撃銃をこっちに向けんな。頭悪いんですかあ糞ガキ」

俺の言葉にばいと狙撃銃を投げ捨てて、ガキは頬を膨らませた。

「やめた」

「意味わかんねーっての。テメエが練習したいからっつーからわざ
わざ俺が取りに行っちゃったんだろっつが」

「じじいがいるときがちる。できない。どっかいけ」

「おまつ……………自分の言ったことを思い出せや」

「おぼえてない。どっかいけ」

「かーわいくねえの。故郷のテメエと同年のガキはもっとかわい
げがあったぞ？ それに根性もあった」

「しらない。どっかいけ」

マジかわいくねー。いつも俺にじとーっと視線向けてきてる癖に

よ。あれか？ 恥ずかしがり屋さんか？ …… そりゃねえか、一緒に風呂にも入ってるし、俺と幸樹の間でいっつも寝てるし。あゝあ、故郷のガキはかわいかったのにさあ。いつもいつもてててーっつって俺の後付いてきてくれてたし、鍛錬する時もずっと俺の姿見て、隣で一生懸命に真似しようとしてたし。そいえばこっちに来てもう一年近くか…… たった一つの任務だが、だいぶかかつちまったなあ。終わったらどーしよ？ って、俺が悩んでも仕方ねえな。俺が帰ったらあいつ、俺の顔忘れてねえだろうな。あんだだけ大泣きされて、それで帰った忘れてましたーとかだったら俺は泣くよ？ いやマジで。

「どっかいけどっかいけどっかいけ」

「……あゝわかったわかった、どっか行ってやる」

「そつ……どっかいけ」

「ただ一つだけ、人生の先輩として教えといてやる。どんな物事もそうだが、練習しねえと上達せんぞ。たとえどんな状況でも、周りになんと言われても、頑張り続けられる奴が強くなるんだからな」

「しね」

「……っぜえ」

もういいや。とりあえず酒飲む。昼？ 関係ないね。幸樹誘って酒飲む、俺は決めた。

「魔法の射手 雷の32矢」

空を駆る幸樹の手から詠唱とともに放たれた三十二の弾丸。それに一拍遅れて、辰也は真つ直ぐと駆けだした。陸上選手、オリンピック金メダリスト真つ青な速度で大地を蹴る。待ち構えるように銃を構える男。標準を辰也の胸に合わせ引き金に指がかかった時、男の喉元には辰也の肘が突き刺さっていた。息を吐きだすことも許されず、急激に加速した速度からの肘は男を重力に逆らい一転二転、宙でくるり上下を反転させた。

「ふつつふくん」

周りにいた男の仲間の銃口が辰也に向けられ、鉄の塊が音を超えて飛び出した。

「仲間撃つなぎ、どーかと思っぜえい」

飛び出した弾丸は盾にされた男を幾度も貫く。その光景に喚く男たちの仲間を尻目に、達也は気にもせず蜂の巣の肉袋を声の聞こえる方へと投げつけた。紅くまだ温かい血潮が透明な空気を彩る。地面が赤く染め上げられた時、男の仲間の一人が喉に肘を押し込まれ、くるりくるりと上下を反転させていた。再び蜂の巣状の肉袋が出来る、また誰かがくるりくるりと上下を反転させる。

「夢の中へ、夢の中へ……逝っちまってるわ」

誰かの何かが切れて、男の仲間が狂ったように周囲に鉄を降らした。仲間が当たるのもお構いなしに、目の前でくるりくるり仲間が回転して同士討ちしていく異様な光景に耐えられなかった。一緒に笑いあった仲間の額から血が吹き出る。一緒に酒を飲んだ仲間の胸から血が吹き出る。一緒に色街に繰り出した仲間の腕から血が吹き出る。一緒に商品を弄んだ仲間の足から血が吹き出る。そして視界の上の方に地面が現れて……そこで彼の意識は途切れた。

「探し物はなんですか」

後方で息のあるテロリストたちを捕縛魔法で捕える幸樹をちらと見て、辰也はまた駆け出す。前方で土煙りが高く上がるところへ向けて。見れば中世の時代、馬上の騎士が持っていたようなランスを携えた大柄な男が見えた。辰也が今籍を置いているNGO団体の現団長だ。

「見つけることはできましたが」

団長と辰也の間に一台のトラックが見えた。明後日の方向へとエンジンを掛け、走り出したトラックへと向けて、速度を落とすことなく宛らバツタ能力を得た改造人間のように足の裏から突っ込んだ。防弾ガラスは粉々に砕け散り、運転手の頬骨はごきりと折れた。

「トラックの中、荷台の中に」

グラリと車体が横に傾き、トラックは大きな音を立てて横転した。からからとタイヤが空に周る。揺れる車内ですっかりと運転手を締め落として、ドアを蹴破り外へと這い出る。

「探したけれど俺は狙われる」

ターンと音が一つ、辰也の方に一つ赤い筋が走った。そしてターンともう一つ音。200mほど先で、一人狙撃手が高台から転げ落ちるのが目に入った。

「糞ガキも処女を捨てる」

もう一度後ろを見る。幸樹の隣、狙撃銃を構えたマナが辰也の目に飛び込んで来た。その姿に少しだけ苦い顔を作って、辰也はまた土煙りの方へと駆け出した。

「それより俺は俺の仕事」

先程の速度よりもう少しだけ速く、辰也は地面を蹴る。

「夢の中へ、夢も中へ、いつてみたいと思いませんか」

狙撃銃を思わず地面に落としたマナは膝を崩し、地面へとへたり込んだ。そんな彼女の肩をやさしく幸樹は抱きしめる。汚れた頬を手でぬぐい、腰まで伸ばした黒髪を梳いて、真名を落ち着かせるように抱きしめる。

「ふふっふん」

もう一度、急激に加速した辰也の肘がテロリストの喉元へと突き刺さった。

「……………」

見事に奴隷商人たちから奴隷を解放する事に成功した俺たちは、勝利の宴ってことで凄まじく盛り上がっている。酒瓶を投げ合って歌を唄い、笑い声が辺りで木霊する。それは俺たち団体のメンバーと同じように解放された奴隷たちも、久々に与えられた、これからずっと続いていくであろう自由に酔いしれてるって訳だ。

「……………」

なのに俺の目の前の二人、ガキと幸樹は完全にお通夜モード。なんでかって？ そらガキが処女捨てたから。って性的な意味じゃねーよ。相手が誰だろうとさすがに引くわ。七つ八つのガキ相手に性的興奮を……とか、ありえねえな。やっぱり女は十代後半から三代前半のムチムチ美人に限る。ガキ？ お呼びじゃねーよ。この俺のもっこりを満たすにゃそれしかねえ。

「つーことで幸樹、せっかく任務成功した訳だし色街でも繰り出そうぜ。中東の美人さんと遊んでさあ、ぱーっといこうや」

「今の状況を解って、それを本気で僕に言っているだったら僕は君を軽蔑するよ」

「……………じょうだんですよーっ」と

色街は本気だが。たーく、誰もが通る道だが、これだから一般人はめんどくせーんだっての。俺みたいにちっちゃい頃から人を殺す

のは当たり前だ！　みたいな教育受けとけばいいのにさあ。……イヤまあ俺の境遇は里でもちと特殊は特殊だったんだけどな。とりあえず慰めの言葉でも一つ。

「ガキ、見てみる。アレがテメエの守った人たちよ」

「……ん」

ガキはちらりとこっちに首を向けて、泣きながら笑う元奴隷たちを見つめる。

「辰也の言うとおりだよマナ。君は彼らを、そして僕たちを守ってくれた。そのお蔭で救えた命がある、笑えた命がある。やり方は間違っているのかもしれないけれど、マナのお蔭で今在る人たちがいる……それは誇りに思ふべきことなんだ」

「ほこり」

「ありがとうマナ、僕の守りたかったものを守ってくれて。ありがとうマナ、僕の夢を叶えてくれて」

「んっ」

くしゃくしゃと幸樹はガキの頭を撫でた。気持ちよさそうに目を細めるガキ。とりあえずは一件落着……といきたいとこだが、水を差すようではあるが俺も一言加えとかねえとな。余りにも幸樹の意見は綺麗すぎる。

「なーんてのは良い子ちゃん 의견。俺はんなこーしょーなもん掲げねえからよ、俺も一つテメエに俺の意見をくれてやっところ」

「いらぬい」

「遠慮すんなや。ま、人間何か殺さんや生きていけねえんだ。今回偶々人間だっただけの話。お前が磨いた技術で生きていくために、もつと俗に言えば金を稼ぐために、人を殺したんだ」

「辰也、でもそれは……」

「ままま、俺が話してるから後でな。と、もかくそんな考え方は誰かに駄目だ、なんざ言われるかもしれないねえ。けどしかたねーじゃん、それしなきゃ生きていけねえんだから。だから俺は人を殴って人を殺す、その技術があつてそれでいいと思ってるから。報酬さえリスクと技術に見合えば仕事に貴賤なし、覚えとけ」

ガキは下を向き考える。さてはこの先のガキがどんな意見を自分の中にぶつ立てて、人を傷付け殺す戦場に身を置こうとするのか、それとも廃人になるか、その前に逃げ出すか。俺は未来が読める訳じゃねえからわからねえが……。

「じじいはくず、それはわかる」

やっぱこのガキうぜえ。それだけは間違いないわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407z/>

少年少女物語 + ただし魔法有り

2011年12月9日01時49分発行